NO.42
'15 JUNE

2015年6月月発行 42号 すどう美術館
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373
TEL.0465-36-0740　FAX.0465-36-0739
info@sudoh-art.com
http://www.sudoh-art.com

竹橋啓一 X 加藤肇司展（5 月 12 日～ 24 日）を終えて

竹橋啓一

すどう美術館には駅から三度も人に聞いてタドリ着きました。居場所を昧ましながらそこに確と在る、というのは館長さんのイメージと少し重なると思うのは私だけだろうか。

高校卒業以来の畏友である加藤肇司さんに誘われ、現代的な作品ではないが同じ時空に居るのだから、と単純にＯＫ．二十数年ぶりの再会となる、全て加藤さん任せの展覧会を開きましたが、加藤さんは大変だったと思います。

会場では加藤さんの絵を横目で見ながら、自分の絵は時代とズレているナーという思いでした。足を地に着けて頑張っている加藤さんは「本物」でした。

私が絵を止めてから十年程経ちますが、加藤さんがステキな友人達や須藤夫妻に囲まれての活動は、充実したものであったに違いないと思われました。その人々の中に入っての会話は、人との交流の少ない私には、短時間ではあったが楽しく刺激的で、今後の課題などを示唆して呉れました。私の少ない知恵では、「現代」を相手にするには荷が重いけれど､ほんの少しでも「現代」と関われたら良いのに・・・。

色々と失敗して、ならば、いっそのこと昔の落描き時代に戻って楽しく描こう、というスタンスの作品で、意味はあまり無く、全く意味がなければもっと良いのですが、そのようなモノは不可能なので、今のまま目に映ったモノを描いて行こう、という所です。

帰り道も迷ってしまい、高速道に上るのに一時間近くかかり気持が凹みました。ナビを装着していない車での走行は、自分の生き方に似ているナーなどと思いつつ七時間かかって無事富山に帰着。今までで最も長いドライブで､シッカリ身にこたえました。

田舎で平凡に暮らしている私には今回の展覧会は、疲れたがとても良い思い出となるものでした。最初で最後のつもりでしたが、又の機会があれば良いと思っています。

第３回「アーティスト・イン・レジデンス」実施に向けて

すどう美術館 館長　須藤一郎

世界的な視野に立って、芸術の発展、アーティストの育成、支援、そして市民との交流などを図る目的で、これまで２回実施してきた「アーティスト・イン・レジデンス」は、市民やマスコミ、その他多くの方面から多大な評価をいただきましたが、このたび、その３回目を行うこととし、現在、いろいろな準備を進めています。

具体的には、１１月１９日から１２月１日の間、国内外から１０～１２名の作家を招待し、滞在場所や制作場所を提供、作品を制作していただき、その作品を何か所かの会場で展示します。

今回も小田原市の尊徳記念館を制作場所とし、作品の展示は前回と同様、市の清閑亭、すどう美術館他で行なうことを予定しており、制作期間中、公開制作やシンポジウム、コンサート、ワークショップなども行います。

実施にあたっては私が「西湘地区アーティスト・イン・レジデンス実行委員会」の代表となって事業を推進いたしますが、今回は神奈川県からも実施についての要請があり、県および小田原市の協力のもとに行うものであります。

２０２０年のオリンピック、パラリンピックに向けてスポーツだけではなく、文化芸術についても盛り上げていくという国の方針があり、神奈川県からはその一環として「アーティスト・イン・レジデンス」をメインのテーマとして取り上げたいとの説明をうけています。

これを裏付けるように、先ほど中長期の文化行政の方針を定める「文化芸術の振興に関する基本的な方針」が閣議決定されており、オリンピック、パラリンピックに向け、「文化芸術立国」の実現を目指すとされています。その中で新規の重点戦略の一つとして「国内外の芸術家を積極的に地域に受け入れる取り組みへの支援」があります。

「アーティスト・イン・レジデンス」の活動は、まさにこの方針を先取りして行っている事業といえるのではないでしょうか。

ただ、このプロジェクトの成功のためには、引き続き、多くの皆さまのご支援、ご協賛が必要です。趣旨にご賛同いただき、いろいろな面でご協力をいただければと幸いと思います。

点描　こんな話でよかったら (29)

仙仁司

どうでもいい話かな、物心のついた戦後社会の中で、否というほど聴き、否というほど口ずさんだ３曲、愛唱歌と美意識の始まり。

１「ゴンドラの唄」（1915 吉井勇作詞、中山晋平作曲、松井須磨子唄）

２「この道」（1926 北原白秋作詞､山田耕作作曲､赤い鳥所収）

３「早春賦」（1913 吉丸一昌作詞、中田章作曲）

この頃４人の姉達はすでに年頃に達していてよくこの曲を唱っていたように思う。幼い弟は無意識のうちに覚えて、あかき唇あせぬ間に、熱き血潮の冷えぬ間に～お母様と馬車で行ったよ～氷融け去り葦はつのぐむ～などの詞はゾクっとする程印象が強く、記憶が深まるにつれて、鋭くきりとられたこれらの詞を手掛かりに様々な季節の自然観、人間観を築いて来たように思う。これが言葉の力というものかと感じている。これこそ美意識の萌芽であった。

軍歌から解放された姉達の気持を励ました３曲はいつの間にか役目を果たしたかのように歌われなくなり、やがて高峰三枝子の「湖畔の宿」に変わり、３曲は、軍歌を歌わずに済んだ少年期に入った弟の愛唱歌になった。

大正から昭和初期は多くの叙情詩が作られ人々の心の隅々まで浸透して優しく包んだが、やがて競い合うように軍歌が作られ戦時色一色に染まり、人々の心から美意識はすっかり抜け去ってしまった。ようやく築かれた美意識だったというのに、戦後７０年を迎えてもまだ失われたままのように思う。

築くのは大変、失うのは易い。

白いノート　20

花に

今年は例年になく大輪の紫陽花が身近に見られて、梅雨時のうっとうしい気分をすっきりとさせてくれる。季節の花々や木々の緑の生命力あふれる姿は、通勤途中や仕事の合間、そんな日常のひとときであっても、ハッとさせられるものがあり、エネルギーを与えられる。

花の咲く表情や木々の枝ぶりなど、自然の美しさは人間には描ききれない、と聞いたことがある。作り物ではない自然は、時に驚くほどの絶妙なバランスや色彩を見せ、その姿や光景は一瞬にして人の心を動かしてしまう。そんな時、かなわないなあ、とこの話を思い出す。

しかし自然の美しさにはかなわなくとも、日々目にするその自然からもらった力で、見る人の気持ちになにかが響くような強さを持った作品を描くことは出来るのだと思う。

以前住んでいた鎌倉の線路沿いに咲く紫陽花が好きで、毎年車窓からお花見をしていた。今年も白い花を咲かせているだろうか。

高橋玉恵

心と身体

利根川佳江

私は立体作品を中心に制作しています。抽象的で有機的な形が多く、素材は発砲スチロールや金属に紙粘土をつけたり、紙を貼ったり様々です。立体作品なので、自然と空間を意識したり、身体感覚を大切にしながら作っています。

私は以前から気功太極拳をやっているのですが、太極拳がきっかけで身体を通して感じることに興味を持つようになりました。太極拳は呼吸に合わせたゆっくりとした動きで、心身共にゆったりと穏やかになります。心と身体は繋がっていると実感します。太極拳を始めてから作品も変わってしまいました。

１年程前から以前からやってみたかったベリーダンスも始めました。ベリーダンスは歴史は古く、古代、豊穣祈願や子孫繁栄のための儀式で踊られていたのが起源という説もあり、子宮の踊りとも呼ばれ、女性の身体に合った踊りと言われています。また女性が女性である事を謳歌する踊りであるとか、女性性を解放する踊りとも言われ、実際踊ってみると、言葉にするのは難しいですが、身体の内側から生き生きとしてくるような、自分自身に戻って行くような感覚で、レッスンが終わった後は心身共にすっきりとして何とも言えない開放感と幸せな気分に包まれているのです。

先日発表会があったのですが、面白いと思ったことがあります。ダンスはアートの作品と違って自分で自分が踊る姿を見ることができません。レッスンの時は鏡で見ることはできますが、本番では自分がどんな踊りをしたのか全くわからずに終わります。わからないのでかえって気が楽ですが、不思議な体験でした。

それと、ダンスは上手い下手には関係なく踊る人の個性がストレートに出るものだと思いました。同じ踊りをしていても踊る人によって全然違って見えます。面白いです。

ダンスもアートも、根本では通じるものがあるように感じています。

展覧会 info

第 17 回若き画家たちからのメッセージ展受賞展

田中鉄人展
7 月 28 日 (火) ～ 8 月 9 日（日）月曜休館
11：00 ～ 18：00（最終日～ 17：00）

作家のことば
鉛筆の魅力とは何であろうかと考えると、最初に頭に浮かび、そして最大の魅力だと個人的に思うのはその色味だと思います。黒鉛と粘土からなる鉛筆は圧倒的にシンプルで、生々しい色味が感じられます。自分の制作したものが、鉛筆の美しい色味を伝えられるものになっていて欲しい。自分が鉛筆に魅力を感じる部分を、鑑賞してくれる方にも同じように魅力を感じる作品になっていればと願っております。

鋤柄大気展
7 月 28 日 (火) ～ 8 月 9 日（日）月曜休館
11：00 ～ 18：00（最終日～ 17：00）

作家のことば
物質は多様な [状 態] で そこに在る。
物質、身体、空間を、ニュートラルな関係の中で共振させ、新たな [状態] を 提示する。
それは、我々に内側から内側へ、外側から外側へのひろがりを捉える、新たな視点を開かせるだろう。
本展では、身体と物質との、相互の凝縮された関係によって、様々な形態を出現させる。そして、それらが空間と共振することで、どのような [状 態] が立ち現れるかを見たいと思う。

田沼利規展
8 月 18 日 (火) ～ 30（日）月曜休館
11：00 ～ 18：00（最終日～ 17：00）

作家のことば
画面と向かい合うとき、私は自分自身が森羅万象の一粒であることを強く自覚します。「生の連環」をテーマに絵を描いていますが、これは世界と生命のサイクル、そして最も身近な存在である「わたし」を見つめる行為に直結するのです。今展では、近年制作の主軸に置いているモノタイプやドローイングの作品に加え、新たな表現の展開も試みたいと考えています。
すどう美術館では初めての個展、多くの方々にご高覧いただけましたら幸いです。

縁々　世界一小さい美術館ものがたり

みて・あそんで・つくる展

さる5月1日から10日まで、すどう美術館では珍しい催しを行った。創作おもちゃの作品展示とおもちゃ作家によるワークショップ、「みて・あそんで・つくる」展で、期間中500人を超える人たちの来館があり、とても楽しい展覧会となった。主催は「日本おもちゃ会議」、全面的に協力してくれた小田原市とすどう美術館が共催の形で参加した。

おもちゃは子どもになくてはならないものであるが、大人にとっても遠き日の郷愁を呼び起こす大切なもの。会期中、子どもも大人も笑顔に溢れていたのが心に残っている。

なかなか帰ろうとせず、いっしょにきたお母さんたちが困ってしまう場面もたくさんあった。

もっとも、おもちゃと遊び、子どもがなかなか帰ろうとせず、いっしょにきたお母さんたちが困ってしまう場面もたくさんあった。

展示の作家は21名、それぞれが独自の世界を持っていて、素材も木、布、紙などさまざまであったが、どの作品にも心のやさしさが感じられた。

ワークショップは5日間で10講座、いずれも人気であったが、特に「デコレーション オルゴール」、「コリントビンゴゲーム」、「ミニハウス」をつくる講座などは早くから定員をオーバーし、申し込みを断るのがたいへんであった。

他におもちゃについての岩城敏之さんの講演、小黒三郎さんの3日間におよぶ糸のこを使っての木のおもちゃ作りの実演、小田原駅地下街の「ハルネ広場」での出張工作教室など盛りだくさんのイベントを行っている。

終了後、その世界で有名な小黒さんからご ていねいな礼状と新作のおもちゃが送られてきたが、その中で、「今後もすどう美術館で木のおもちゃのイベントできれば嬉しく思います」と書いてあったのが私にもうれしいことであった。

それにしても、大人の作家が嬉々としておもちゃ作りに励んでいる姿を想像すると、ちょっと微笑が浮かんできてしまうのである。須藤一郎

編集後記

先月開催した「日本おもちゃ会議」の展覧会は楽しいものであった。

会期中、キッズいわきの代表岩城敏之氏の講演があった。その中で、遊びはとても大切なこと、特に「大人の遊び」は命がけでやるべきであり、このすどう美術館の須藤夫妻は、そのさいたるもの！である、と話してくれた。え？うーん？と一瞬びっくりした。そして幸せな気持になった。

これからは気合を入れて遊びの名人になろう。須藤紀子

「西湘地区アーティスト イン レジデンス」協賛のお願い

本年 11 月、国内外からアーティストを招待し芸術支援を行う第 3 回「西湘地区アーティスト イン レジデンス」にご協賛いただければ幸いです。
資金面以外でのご協力もよろしくお願いします。
（実行委員会事務局　すどう美術館）

・個人協賛金　一口　5,000 円（5,000 円以下の小額でもお受けします）
・企業団体協賛金　一口　50,000 円

※ご協力いただきました企業団体様等には、ご希望によりレジデンスで制作されます作品を寄贈いたします。また、本プロジェクト PR のためのポスター、チラシ等の印刷物にお名前を記載させていただきます。

（振込口座）
みずほ銀行　小田原支店　普通口座　２８９８２９１
口座名義　西湘地区アーティスト イン レジデンス